

益城町仮設住宅聞き取り調査の自由回答の分析

熊本大学 学生会員 ○川野倫輝 正会員 田山琢也 学生会員 佐藤嘉洋

1. 目的と背景

平成 28 年熊本地震によって住家を失った人々のために、熊本県益城町では 18 団地 1562 戸の応急仮設住宅の整備が行われた。しかし、応急的に整備された仮設住宅の居住環境は良好とは限らないと予想され、入居者が抱え得る不満や心境を把握することは、行政やその他組織が適切な支援を施していくうえで重要である。

本研究は、益城町仮設住宅での聞き取り調査の自由回答の分析から、仮設住宅居住者が置かれている状況、そして心境を明らかにすることを目的とする。

2. 益城町仮設住宅聞き取り調査

分析対象とする調査は、熊本大学が主体となつて実施した「仮設住宅以降のお住まいについての意識調査」である。表 1 に調査の概要を示す。自由回答設問としては、「益城町の復興・復旧において、重要と思う点」と「行政、大学などへの意見・要望も含めて、現在のお気持ち・心境」についての 2 つがある。その他にも、設問の答えに該当しない回答者の発言も極力全て自由回答として記入している。このため、約 91% という高い水準で自由回答を得ており、その内容も被災時の体験談から町の復興への要望など様々である。

3. 自由回答の分析

(1) 基礎的集計と共起ネットワークによる分析

自由回答分析には「KH coder」を用いる。表 2 に頻出語上位 30 語の抽出結果を示す。上位には「仮設住宅」「住宅」「仮設団地」のような仮設住宅入居者の回答と

表1 益城町仮設住宅聞き取り調査概要

調査期間	2016 年 6 月 30 日～2016 年 11 月 20 日
調査方法	1 戸毎の訪問面接調査
調査対象	益城町仮設住宅 17 団地 1556 戸
調査目的	・ 必要な復興住宅の戸数、希望する場所などの把握 ・ 不自由な点、不安などの幅広い把握
実施世帯数	1196 戸 うち自由回答あり 1084 戸

しては一般的な語が並ぶ。その他に「解体」や「情報」といった語も上位に位置しており、解体や情報に関する話題が多かったと考えられる。また、「欲しい」という要望に関する語や「困る」や「不便」といった語が抽出されており、仮設入居者が現在の状況に不満を感じていることが推測される。

頻出語の抽出からトピックの把握は可能であるが、語と語の関係性の把握ができないため、具体的な内容の解釈が困難である。そこで、図 1 に共起ネットワークを示し、語の共起関係を踏まえた内容の解釈を行っていく。ここでは、最小出現数 20 以上かつ $jaccard \geq 0.05$ という条件を満たしたもののみを表示している。

表 2 最頻出語 30 語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
仮設住宅	406	住む	138	自宅	95
家	223	思う	132	車	95
人	213	バス	128	近く	93
欲しい	201	子供	119	感じる	92
解体	199	役場	109	困る	90
早い	179	行く	108	今	89
仮設	174	買い物	106	町	87
情報	170	来る	106	生活	86
仮設団地	149	入る	102	不便	85
狭い	139	場所	98	道路	82

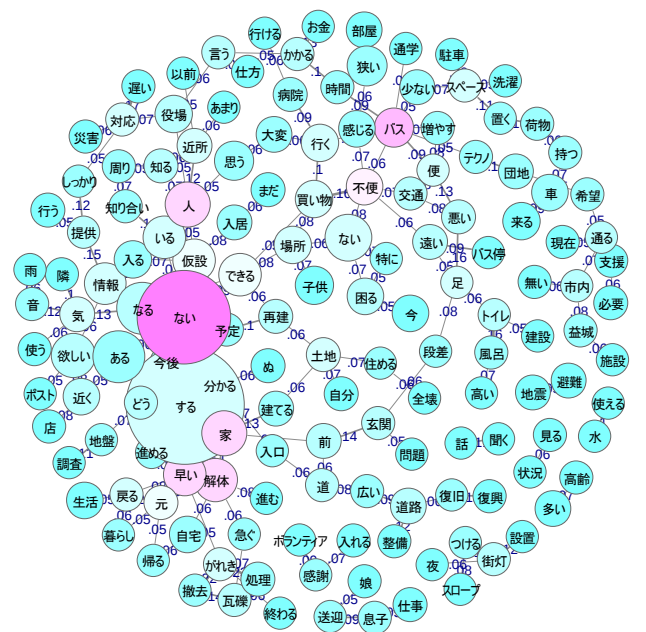


図 1 共起ネットワーク

頻出語で上位に位置していた、「解体」と「情報」に関するものとしては、「自宅の解体を急いで」「情報提供をしっかりと」と解釈できる。また、要望に関しては、「店やポストが近くにほしい」や「街灯の設置」、「スロープをつけて」と仮設住宅周りのものが挙げられた。頻出語の集計から浮かび上がった不満に関しては、「バスの便が悪い」や「役場の対応が遅い」などが挙げられる。一方で、「困る」は、「ない」とも共起しており、「特に困ることはない」という解釈もできる。

(2) 個人属性についての対応分析

聞き取り調査の中で、様々な個人属性を得ている。ここから、性別と年齢を用いて対応分析を行った結果を図2に示す。プロットされている語は最小出現数20以上の語のうち、属性間の差異の顕著な語としてカイ二乗値が大きいものから100語を抽出したものである。

原点から縦軸の正方向に女性、縦軸の負方向に男性の回答において特徴的であった語が位置している。男性の回答では「復興」「復旧」などの復興に関する語や「地盤」「建てる」などの自宅の再建に関する語が特徴的であることがわかる。同じく「対応」「遅い」という語も男性で特徴的である。これは、図1の共起ネットワークから行政に関する語であると考えられる。これに対して、女性では仮設住宅や交通などの身近な生活環境に関する語が特徴的であった。また、互いに人付き合いに関する語と考えられる「知り合い」と「コミュニティ」が性別で対照的に用いられていることがわかる。「知り合い」とはある程度の付き合いがある人を指すのに対し、「コミュニティ」はより広い住民の集団のことである。ここからも性別によって関心の範囲が違っていることがわかる。

横軸について見ると、原点からの正方向には10、20、30歳代と40、50歳代で、負方向には60、70歳代と80、90歳代で特徴的な語が位置している。10、20、30歳代では「子供」「通学」のような子供に関する語が特徴的であり、80、90歳代では「暑い」「スロープ」などの仮設住宅内の環境についての語が特徴的となっている。80、90歳代は仮設住宅内にいる時間が他の年齢層と比較して長くなっていると推測され、この影響で仮設住宅内の語が良く相関していると考えられる。40、50歳代では、「気」「音」などが相対的によく用いられており、これは図1の共起ネットワークから「音が気にな

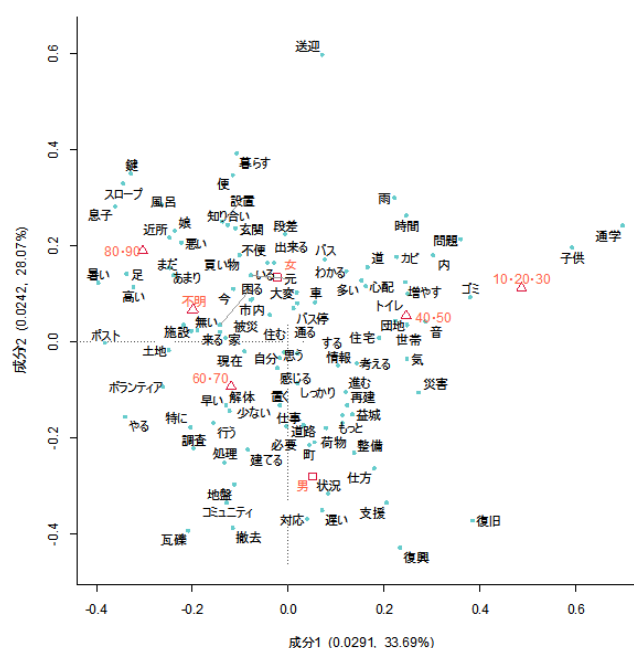


図2 対応分析

る」と解釈できる。60、70歳代は、「解体」「早く」などが相関しており、この年齢層は他の年齢層と比べて早期の解体完了を望んでいると考えられる。

4. おわりに

益城町仮設住宅聞き取り調査の自由回答から頻出語を抽出し、共起ネットワークを用いた分析を行った。解体の迅速化や情報提供、仮設住宅の設備に関する要望や交通や役場の対応への不満が多く上がっていることがわかった。個人属性を用いた対応分析からは、女性では仮設住宅や交通について、男性では自宅の再建や復興に関する語が特徴的に用いられていたことが分かった。性別により回答が身の回りのことから復興や再建という先を見据えた話までに変化していることがわかった。今後の課題としては、調査日や仮設住宅居住日数などの経時データを用いた分析が挙げられる。

謝辞：仮設聞き取り調査には、九州大、九工大をはじめ13大学の皆様のご協力をいただきました。深く感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 藤森崇浩, 小山真紀, 清野純史: 災害報道からの個人属性の状況の抽出~東日本大震災後の全国紙と地方紙のテキストマイニングから~, 地域安全学会論文集, No.23, pp55-64, 2014.